

令和4年度 鶴岡市子ども読書活動推進委員会 会議録概要

○日 時 令和4年10月13日(木) 午後15時30分～

○会 場 鶴岡市立図書館 講座室

○次 第 委嘱状交付

1. 開会
2. 教育長あいさつ
3. 委員自己紹介(庁内会議委員等 自己紹介)
4. 推進委員会会長、副会長の選任について
5. 報告・協議
 - (1) 第2次計画について
 - ・計画の【策定背景と概要】 について 資料1
 - ・計画の【数値目標】及び子どもの不読率の調査について
 - ・計画取り組みの実施状況について 資料2
 - ・計画の成果と課題について 資料3
 - (2) 第3次計画に向けた課題と重視したいポイントについて 資料4
 - (3) その他
6. その他
7. 閉会

○出席委員

井上裕子委員、渡邊敦委員 三浦洋介委員、谷江るみ委員、中村ちか子委員、
佐藤大吾委員 兼子由香委員、忠鉢春香委員 丹生直子委員

○欠席委員 なし

○市側出席職員

教育長 布川敦、教育部長 本間明、子育て推進課長 渡会健一、健康課長 伊原千佳子
学校教育課長 成澤和則、社会教育課長(代理)社会教育主査 金井亜矢子、
図書館長 武田綾子、子育て推進課主査 齋藤真紀子、かたばみ保育園保育主任 佐藤香
図書館主査 船岡里佳、図書館主事 佐藤笑奈

○公開・非公開の別 公開

○傍聴者の人数 0人

○会議内容

・委嘱状交付

教育長より委員へ委嘱状交付

- 1 開 会 (部 長)
- 2 教育長あいさつ
- 3 委員、及び庁内会議委員 自己紹介
- 4 推進委員会会長、副会長の選任について
立候補、また推薦者なく事務局より提案
会長に三浦洋介委員、副会長に中村ちか子委員
承認の上、以上の2名に決定。
- 5 報告・協議
 - (1) 第2次計画について 事務局説明
 - ・計画の【策定背景と概要】 について 資料1
 - ・計画の【数値目標】及び子どもの不読率の調査について
 - ・計画取り組みの実施状況について 資料2
 - ・計画の成果と課題について 資料3
 - (2) 第3次計画に向けた課題と重視したいポイントについて 資料4
 - (3) その他

【質疑・意見】

(委員)

昨年度アンケート調査について意見があったが、紙媒体での調査は、大変難しいが、(高校は)生徒に一人一台パソコンがあるので、それを活用すれば集計もできるため、調査は可能だと思われる。

読書について高校生の状況をお話すると、高校生はやはり、忙しく時間が取れないのが、正直なところである。また、スマートフォンの普及によって、そこに時間が取られ、紙媒体の本に触れるということが、本当に少なくなっていると感じている。

本校においては、書架があるところを学習センターと呼んでおり、平成10年に設立し、管理棟と教室や特別教室とをつなぐ、真ん中に位置している。新しい時代に適用できる人材育成を目標に掲げ、学習センター機能を建物の中心におく構造になっている。

本校は、総合学科と普通科との併設校として始まったが、総合学科が課題研究に力を入れており、今でいう「探究学習」の先駆けであったとも言える。「調べる」ということが非常に大事になってきており、生徒も図書館・学習センターを利用している。授業でも、さまざまな科目において、この学習センターを活用して展開している。

そして、平成25年にいわゆるICT(情報通信技術)いうことで、国の事業の一環で学校でもiPadが導入され、検索が簡単にできるようになった。この辺あたりから紙媒体離れが進んできたと感じている。課題研究においても、「インターネットで調べる」ことで簡単に検索することができ、今までは必要な紙媒体の文献を調べていたものが、インターネットにて検索することが多くなっている。

だからこそ、魅力ある学習センターにしていこうと創意工夫をしている。センター内の書架配置を変えたり、コーナーを作ってみたり、課題研究のためのおすすめの本を提示したりしている。

また、「鶴岡中央高校生に読んでほしい新書110」を作成し、配布する等、推進に努めて

いる。

しかしながら、時代の波に逆らえない部分があると感じており、読書が好きな生徒は、読みなさいと言われなくても読み、ただ多くの生徒は、やはり時間がないこともあり、読書から離れてしまう。

そんな中、本校でわかりやすく、使いやすい図書館、学習センターになるようにと、生徒の発案でセンターを*空間デザインした。この学校案内の表紙も本校の生徒がデザインをしている。生徒自身が魅力ある図書館を考えたり、運営に関わったりすることで、興味を持ち、図書館に足を運んでくれたと思っている。

(※R2年度子供の読書活動優秀実践校「文部科学大臣賞受賞」)

スマートフォン、タブレットの普及によって「検索イコール調べること」になりつつあるが、やはり文献を読んだりすることで、自分の世界を広げるということを教師側も気を付けて指導していかなければならない。

インターネット上での「調べること」というのは、情報量が多いがどんどん閉塞的に感じる。読書はもっと広げるものであり、様々なことを見る、知ることで広がっていくものである。本を読んでもらえるよう、さらに指導していきたい。

(委員)

アンケート調査については、小学生でもタブレットを使うことができるため可能である。

学習指導要領でも「学活」の中に「読書の指導」が組み込まれており、必ず学校でも指導することの一つである。アンケートを取ることによって、子どもたちの読書活動の実態が把握できる。それを活かして、子どもたちがいい本に出会う機会を作っていきたい。

保育園、幼稚園、小学校と成長するにしたがって本が好きになり、そして字が読めるようになり、自分で読める喜びを知り、嬉しそうに読む子どもたちの姿がある。大切にしていきたいと思う。アンケートについては、ぜひ調査をして指導に活かしてほしい。

本校も読書に関する課題を受け、図書主任を中心に「おすすめの本(リスト)」の見直しをし、その結果、すごく本を読む子どもたちが増えた。

またこの夏に、「親子読書」に取り組み、とても良い機会となった。「親子でこの本が読めてよかった」と保護者にも好評であった。やっぱり仕掛けていくことが大事だと感じている。アンケート調査は、負担にならない程度にすることはいいと思う。

(委員)

アンケート調査については、中学校もGoogleフォームを活用し、先生方を介せずできる。

今の中学校の実態は、彼らはまったく本を読まないわけではなく、学校にいると朝読書の時間もあり、昼休みには図書館は賑わっている。

つまり、ほかに娯楽がなければ本は読む。本来、読書の楽しみも小さい頃からの積み重ねもあり、わかっていると思う。

ただ例えば、人気のある本は、図書館に20冊同時に入るわけではない。YouTubeは面白いもの、同じものを同時に見ることができる。「図書館」という現時点でのシステムでは難しく、そこに対応できるような仕組みが何かあればと思う。

また、家に持ち帰って読むまで育てられないことは、課題かと思っている。

(会長)

アンケート調査については、小中高とそれぞれのやり方でできるということなので、よろしくお願いしたい。

(委員)

保育園でも読み聞かせをしているし、週末には本の貸出もしているが、保護者の中には読書が苦手な方もいる。活字離れといわれた世代が、親世代または祖父母世代となり、本が好きな人は好き、読まない人は読まないという時代である。そして、さらに進み、今度はスマートフォンの時代になっている。

園での様子から、肉声で読み聞かせをしてもらい、抱っこして親子での触れ合いを大切にしながら本に触れてきた子どもは、大きくなっても、自分で本棚から本を取り出し読んでいる。それが、なかなか難しい子どもさんもある。保育園でもフォローはしているが、お母さんがおっぱいを飲ませながらスマホを見ているケースもある。

読み聞かせをしても、目線が本に向かない、そんな子どもが、年々増えてきているように感じる。読み手側の技量もあるが、読書に触れ始める年代に対して、第2次計画にもあるように、「本のお話をできる大人、手渡してあげられる大人」の存在が本当に大切だと感じている。

数値目標の「ブックスタート」の項目、59%が低く、びっくりしている。自分の時にはブックスタートはなく、すごく良い取り組みだと感じている。

生まれた赤ちゃんに対して、見せてあげる本についても、文字よりも赤ちゃんの視覚に訴えるものを選ぶと良いことなど、わからなければ渡せない。子どもの年齢にあった本の選び方やリストは図書館にもあるし、情報はネット上にもいろいろあるが、読書が好きでなければ、それすらも見ない。ネット上の情報というのは、自分が調べようと思って調べるのであり、興味があれば役に立たないものになってしまうので、すごく残念に思う。

大人になって、例えば「家電の取扱説明書が理解できない人が将来増える」というニュースを見た。国語力、読解力がなく、その説明書を読んでも理解できない大人がどんどん増えていくという新聞記事があり、お母さんたちにもお知らせした。

小さいときに読み聞かせからスタートすること、本が楽しい、文字が読めることは楽しい、読むことが好きだという体験をして、小学校、中学校、高校とつながっていき、言葉の世界がどんどん膨らんでいくと良いと思う。

(委員)

どうして「本を読んでももらいたい」と皆が思っているかということ、やはり先ほどもあったが、現実問題として、「取扱説明書も読めなくては困る」ということもあるが、書類や新聞の文書は読めるけれども、ストーリーや小説が読めない人もいるとか。物語の文章を読み、イメージする、物語の中に入ってそれを楽しむということができない人がだんだん増えていると聞く。小さい頃から言葉を聞く能力、言葉を聞き、お話を聞いてイメージする力を養ってほしい。

学童保育所でも子どもたちの語彙が少ないと感じている。大人も子どもも、本を読む暇がないと聞くが、タブレットが各自持てるようになり、画期的に世の中が変わった。子ども達もタブレットでなら読むのか。

(委員)

子ども達は今、タブレットを持つようになり、タブレットでゲームも読書もします。

(資料4)「課題」にある、「子どもが本を手取る環境が、家庭の経済状況による影響が大きく見られる」ということ、子どもの貧困研究の幾つかの指標のなかでは、「家に自分の学習机がない」、「家に図鑑が一つもない」そういう子ども達への何らかのアプローチが大切だと感じる。

すでに鶴岡市が取り組んでいるように、図書館に来ることすら、おそらくなかった子が利用カードを初めてもらい、図書館に行くという仕組みは非常に良いと思う。

また、読み聞かせの活動もしているが、子ども達が喜んでくれると私自身もうれしいし、活

動を続けていきたいと感じている。多くの学校で取り組んでほしいと思う。英語での読み聞かせも是非やってみたいと思う。

ほかに、土日仕事をしている保護者は、なかなか図書館に来ることも難しいと思う。

たとえば、学童から本を借りてくることはできる。もちろん、学校でも本を借りてくることはできる。「子どもが本を手にする場所」として充実していくことは大切だと思う。ひとり親家庭へのクリスマス会などに、読書活動をしている方々が来てくれる機会があると良いのではないか。

(委員)

県の母親委員会でも、どこの地域でも、子どもがゲームやYouTubeに夢中で、家で本を読んでいることが少ないと同じ悩みが問題になっていた。

学校での「親子読書」が良いきっかけとなっている。コロナ禍になりスタイルも変わってきているが、「親子読書」で絵を書く、取り組みから絵が好きになる子もいた。親と子が一緒に取り組むことで、「子どもの気持ちが育つこと」を実感している。

(委員)

本に触れる取り組みがたくさんあることに驚いているし、素晴らしいと思う。

その中で皆さんから伺った意見を聞くと課題は明確で、「時間がない」ということ、そして「空間」ということ。課題は、「時間のデザイン」と「空間デザイン」が必要だと感じた。

読書をするための時間、空間を作り出すためには、ここに図書館来ると、何かしら体験できるということが、大切ではないかと思う。ソライに来る保護者の方は、普段は体験できないことをさせたいと強く思っている。

図書館が中心となり、人が集まるコミュニティが倍になれば良い。図書館が「子どもも大人も行きたい場所」になれば、必然的に集まってくる。例えば、コミセンも、体育館も、塾も合体している、ここに行けば何かあるという場所になれば良いのでは。本だけではなく親も子どもも行きたい場所という仕組みづくりができれば良い。そして、中学生や高校生、大学生からもアイデアを出してもらいながら一緒に考え作っていったら良いと思う。

(会長)

ナイトツアーで参加する子どもたちに聞いても良いのでは。

(委員)

予算も関わるため簡単にはできないが、ブックスタートは0歳児、その後の3歳半の健診でも集まる機会がある。1回だけではなく、0歳の時とはまた違った（発達）段階のことができればいいのでは。

また、先日遠足にてソライに伺った際に、保育園にはない「宝石の図鑑」に、子ども達はとても夢中になった。子ども達が興味のあること、何かイベントでもそうだが、「子ども達が興味を持つ、YouTubeではできないこと」、スマートフォンよりも興味を引く、魅力のある仕掛けが必要だと思う。

公益文化大学の学生さんたちが、地域の課題を取り上げ、問題解決のための手立てを考え、取り組んでいる。大学生の方たちと一緒に考えていくもの良いのではないか。

(委員)

大人たちが考えているだけよりも、良いことだと思う。

(教育長)

若い方たちにいろんな企画を考えていただくことは、良いことだと思う。
また、読み聞かせをしている大人同士の語る場もあっても良いのではないかな。

(健康課長)

先ほどいただいた意見の3歳児健診時は、0歳児健診時よりも健診項目や指導項目も多く、
歯磨き指導なども加わるため、現実的に時間を取るのが難しいところである。

(社会教育課)

ブックスタートは、家庭教育としての事業として、平成25年から全市で取り組んでいる。
それまでは各地域庁舎にて行っていた事業であった。委員からもあったが、予算の確保が必要
となるため、この場ではお答えできかねるが検討していきたいと思う。

(教育長)

子どもたちの中には、情報を眼からの刺激、耳からの刺激でないと受けとれない子どもが
いる。得意分野も違い、活字を追うことができない子ども、画面からの刺激だと理解しやすい子
どももいる。そのような子どもたちにはどうすれば良いのか、そこも考えていかなければなら
ない課題だと思う。

(委員)

タブレットなどで本を読む小学生はあまり無いと捉えているが、高校生はどうか。今すぐに
ではないが、その辺りも調査してみたいところではある。

(委員)

中学生は読んでいる。ただ有料なコンテンツとなると各家庭で違いがある。高校生については、
調査結果はないが、クラスの中を見ても何人か利用していると思う。

(委員)

中学生も、タブレットを使って読んでいる子もいるし、タブレットで文章を書いている子も
いる。

(委員)

「創作する」、素晴らしい。これからは、時代の流れで電子媒体の読書も含まれていくので
はないかと思う。

(委員)

配信型の読書形態に時代が変化しているので、図書館でも「貸出のかたち」が変わってくる
のではないかな。

(委員)

つくば市の図書館では、個室ブース、ソファがあり、親子でDVDなど親子そろって映像資
料を見たりすることができる空間がありとても良かった。

(委員)

子どもだけに映像を与えて見せるのではなく、「親子でそろって」これがとても良いと思

う。今、親子のふれあいが気薄になっており、課題が見えるお子さんがいる。

就学時健診でも、読み聞かせを大切にしたいとお話した。スマホやデジタル機器が悪ということではなく、便利な道具ではあるが、それよりも「夢中になれるもの、楽しいこと、それも大事にしてください、作って下さい」とお話しした。本でも映像でも「親子で寄り添って…」ここを大事にしていきたい。

一人の子どもがいて、与えられた時間は同じ、24時間しかない。「寝る、勉強、本読む」、時間のバランスをどう取るのか、一緒に考えていきたい。また、高校生、大学生の若い時期から、親になるということを考えて取り組みも良いのではないかな。

(会長)

アンケート調査の際、「不読の子が本を読んだらこんな良い事がある、効果がある」とか、また「課題は何か」などA4サイズ1枚で構わないので情報発進すると良いのでは。

調査も5年度、6年度と続けてしていく、鶴岡市では、どの子どもも本好きにしたい、読書は生涯に関わって大事なことだと伝えたい。

推進計画(冊子)は、学校の棚の中にしまうものではなく、それぞれが継続して目標を書き込むことが出来るものになってほしい。学校で継続して目指していける計画にしていきたい。

20年前の朝暁第1小学校発行の「図書館活用ハンドブック」は、今見ても非常に役立つことばかりである。不読の子どもへの関わり方、どう変わったか、本を読むことで学習への向かい方がどう変わったか、取り組みについても具体的に記してある。学校全体で関わって行く、取り組んでいく、そして「不読の調査」も生きてくるのではないかな。ダイエットも体重計に乗るだけではなく何をしたら大切であり、具体的な事例を参考にし、単年度だけではなく継続していけたら良いのではないかな。

(学校教育課長)

読書好きな子どもを増やしていくのが目標であるが、参考までR4年度の「全国学力・学習状況調査」では(設問)「読書は好きですか」に対して「好き」・「どちらかといえば好き」と回答した数値は、小学6年生は77.4%、中学3年生は66.8%という結果であった。結果がまだ出たばかりで考察も検討していないが、この数値も参考にしながら読書推進に努めたい。

7 その他

8 閉 会